

よっさき す ば 吉崎・次場遺跡出土の板状鉄斧について

今井淳一・林 大智

はじめに

昭和61(1986)年、羽咋市教育委員会による吉崎・次場遺跡(第11次)の発掘調査で、遺物包含層から多量の土器にともなって1点の鉄製品が出土した。

この鉄製品を実見したところ、板状鉄斧の基部であることが明らかとなった。これまで県内では、弥生時代の板状鉄斧と断定できる資料は出土しておらず、時期は不確定であるが、県内初出の資料であり、当該期における鉄製品の流通について考える際に重要な資料である。

そこで、この資料について紹介するとともに、その位置づけなどについて若干考えてみたい。

執筆に際しては、遺跡の概要を羽咋市教育委員会の今井が、その他の執筆および製図に関しては林が分担し、各項の末尾に文責を記した。 (林)

遺跡の概要

吉崎・次場遺跡は能登半島の入口にあたる羽咋市に所在し、標高2m前後の沖積地に立地する弥生時代の集落である。往時の地理的な環境をみると、集落付近は古代交通の要所であり、かつての邑知潟縁辺部の自然堤防上に一貫して営まれている。

これまで通算17次におよぶ調査成果によって、能登地域の拠点的な集落として認識されており、当該地域では最も早い段階で稲作農耕を取り入れながら、古墳時代の始まりまで存続した遺跡として知られている。

また、1983年には推定範囲の約20分の1にあたる11,057m²が国の史跡指定を受けたのを機に、土地の公有化や保存・復元的整備が図られ、遺跡発見から約半世紀を経て、1999年6月に「吉崎・次場弥生公園」という形で新たな活用が始まっている。

板状鉄斧は1986年に実施した農村モデル事業に伴う調査区の遺物包含層から出土している。現在これらの資料は再整理中であり、今回確認された鉄斧も未報告資料であることを、予め断っておきたい。



第1図 吉崎・次場遺跡位置図(S = 1/25,000)

通算第11次にあたるこの調査区は、遺跡確認範囲の北側にあたり、既往の調査区ではJ調査区(第6次:1980年)と北接する位置関係となる。農道舗装部分を対象としているため調査幅が3m前後と狭く、延長約80m、面積240m²を測る。調査区南側では溝などの遺構が存在するが、東区と呼称されている北側では、地表下約1mから青灰色砂層が堆積し、その中に板状鉄斧・土器・石器・獣骨・植物遺体など、弥生時代中期から平安時代に至る各時代の遺物を大量に包含した、いわゆる植物溜まりを形成している。

こうした堆積状況は、J調査区と共通するものであり、集落が形成されている微高地端部から古邑知潟縁辺部への移行地帯であったものと推定される。 (今井)

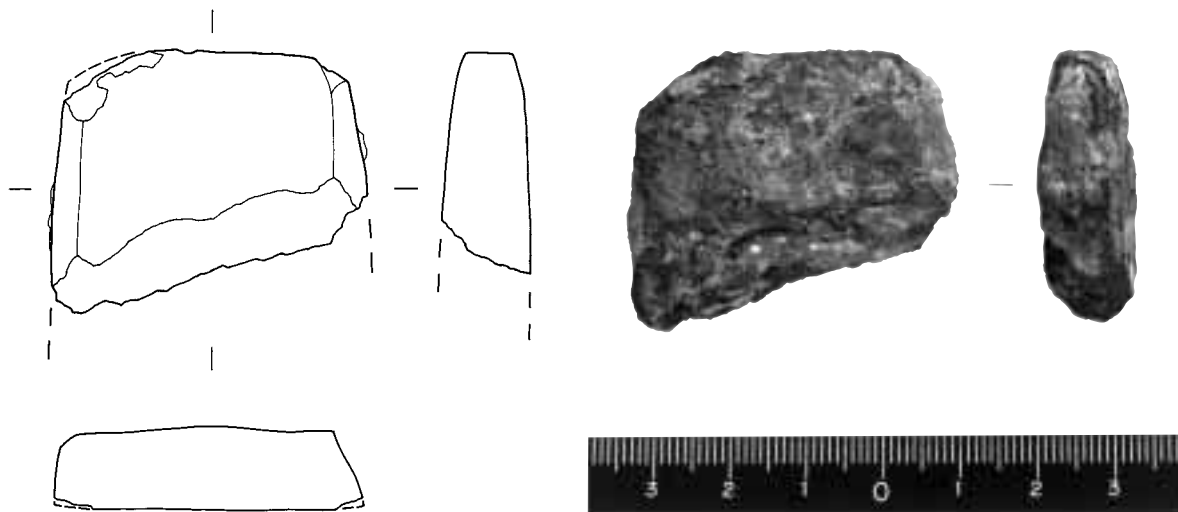
板状鉄斧の観察（第2図）

板状鉄斧は基部のみが残存しており、身部の大半および刃部は欠損している。法量は、現存長3.45cm、基部幅3.6cm、最大幅4.1cm、最大厚1.1cm、重さ33.4gを測る。基部はやや丸みをもち、平面形は刃部に向かって徐々にひろがる形態を呈する。基部の左端は欠損し、背面は錆びにより板状に剥離している。縦断面は基部から刃部に向かって徐々に厚みが増す。横断面は台形を呈し、中央部および両端部でやや厚みを増す。縦・横断面などからは、この鉄斧が鍛打によって整形されたと考えられるが、台形の断面形態は扁平片刃石斧に類似するため、その製作工程に打割・研磨も行われた可能性が考えられる。身の厚みなどからは、伐採斧としての機能が推測できる。（林）

板状鉄斧の位置づけについて

県内で弥生時代の板状鉄斧である可能性が示唆されているものとしては、後期前半に属する松任市旭遺跡群の第43号竪穴住居跡出土資料(第2図1)や、後期後半に属する七ツ塚墳墓群B20号土坑出土資料(第2図2・3)、奥原遺跡の第2号住居跡(第2図4)をあげることができる。しかし、全ての資料が板状鉄斧としての機能を果たすだけの厚みを有しておらず、明確な刃部が認められないことから、板状鉄斧として認めることは困難である⁽¹⁾。それに対して当該資料は、形態的特徴・身の厚みなどから板状鉄斧と断定でき、県内で初出の資料として捉えることができる。

時期については包含層からの出土であるため明確でない。しかし、形態の特徴などから弥生時代に属するものと考えてほぼ間違いのないであろう。弥生時代後期後半～終末期の集落遺跡である金沢市塚崎遺跡は、竪穴住居跡・土坑などから96点の鉄製品が出土しており、当時期における鉄製品の器種組成を伺い知ることができる好資料である⁽²⁾。この遺跡からは、袋状鉄斧が2点出土しているにも関わらず板状鉄斧は出土していない(第4図1・2)。このことから、県内では板状鉄斧から袋状鉄斧への変換は後期後半以前に行われたと考えられる。県内において弥生時代の鉄製品は中期後半に導入が開始されることから、この鉄斧は弥生時代中期後半～後期前半(初頭)のものと考えることが妥当である。また、近畿地方など近隣の地域でも、板状鉄斧は中期後半に出現し⁽³⁾、さらに、台形の横断面を有する板状鉄斧が、大阪府芝谷遺跡の住居S12で認められ、時期は後期初頭に比定できる⁽⁴⁾。これらのことから、この時期決定が裏付けられると考えられる。（林）



第2図 吉崎・次場遺跡出土板状鉄斧実測図および写真（S = 1/1）

鉄製品の導入と集落の消長

弥生時代における鉄製品は、上述のように中期後半に導入が開始され、後期後半～終末期には出土量が急増するとともに、その製作・加工技術も同時に導入されたと考えられる⁽⁵⁾。この鉄製品の動向は、同期の集落遺跡の消長とほぼ一致する⁽⁶⁾。すなわち、集落の消長は、気候の変化や人口圧などによって生じる内的変化とともに、鉄製品をはじめとする物資・情報の伝達網の解体・再構築と密接に関連していた可能性が高い。特に鉄製品は、その利器としての優れた特性や、使用によって生産力の発展を促されることなどから、伝達システムの変化に大きな影響を与えたと推測できる。

また、日本海沿岸部に位置することで、物資・情報の伝達に比較的有利な地理的条件を有しているにも関わらず、県内における中期後半～後期前半に属する鉄製品は4遺跡4例⁽⁷⁾と極めて少ない。後期前半以前には、地域の中核的な集落が生産と流通の拠点として機能しており、物資・情報伝達網も当然それを中心として形成されていたと考えられる。鉄製品もその伝達網によって導入された可能性が高い。一方、後期後半～終末期における鉄製品は、玉作り技術と密接に関連することで、多量に導入されたと考えられ、伝達ルートは日本海沿岸部であると推定できる⁽⁸⁾。

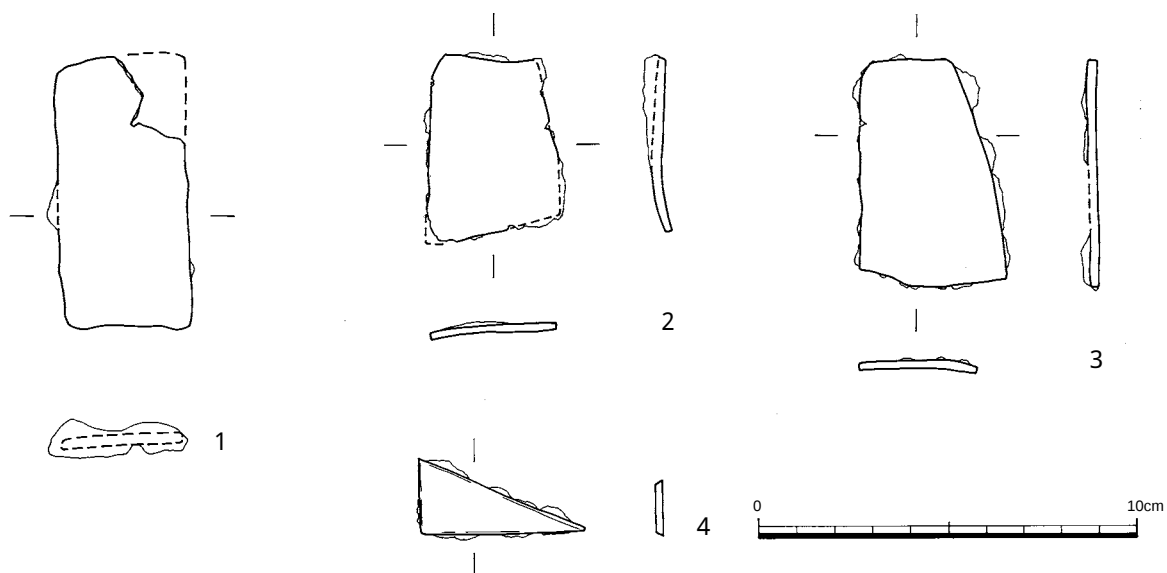
すなわち、中期後半～後期前半における鉄製品の導入源や伝達システムは、後期後半～終末期と異なっていたと考えられ、その差異が同時期の集落の消長に大きな影響を与えた可能性が高い。また、県内において弥生時代の鉄製品が目的的に導入されたものではなく、鉄製品導入の画期は、付随する事象（玉作り技術など）が変化することによって生じたものと考えられる。そしてその現象には、地理的な条件よりも、地域間の社会的関係が強く作用していたと考えられる。（林）

註・参考

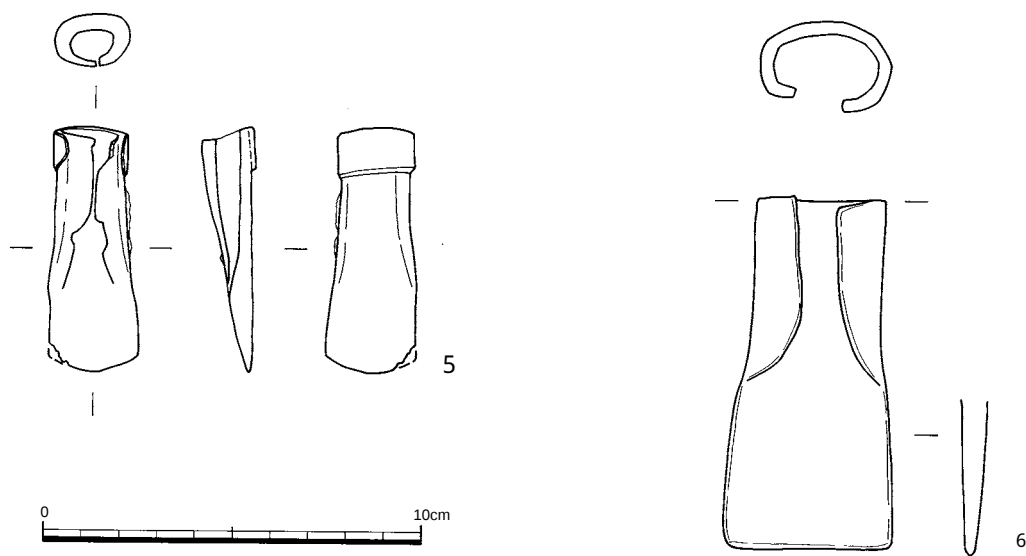
- 1) 奥原遺跡出土例に関しては、鍛冶作業の際に生じる三角形鉄片と考えられる（北陸弥生鉄器文化研究会の検討による）。
- 2) 吉岡康暢・小嶋芳孝ほか1976『北陸自動車道関係埋蔵文化財調査報告』 石川県教育委員会・石川県北陸自動車道埋蔵文化財調査団。
- 3) 川越哲志 1993「板状鉄斧」『弥生時代の鉄器文化』 雄山閣出版、p37・40。
- 4) 宮崎康雄 1996『古首部・芝谷遺跡—高地性集落遺跡の調査—』 高槻市教育委員会、p296.図281.5401。
- 5) 林 大智 1999「石川県における農具の鉄器化と手工業生産の導入について」『農具』石川県考古資料調査・集成事業報告書 石川考古学研究会。
- 6) 安 英樹 1993「加賀における集落の消長」『東日本における古墳出現過程の再検討』 日本考古学協会新潟大会実行委員会。
- 7) 前掲註5)
- 8) 河野一隆 1997「玉作と鉄器文化」『東日本における鉄器文化の受容と展開』第4回鉄器文化研究集会発表要旨集 鉄器文化研究会。

図版出典

- 1 前田清彦1995『旭遺跡群』 石川県松任市教育委員会、p47.第40図223。
- 2・3 楠 正勝・栃木英道1999「弥生時代」『金沢市史』資料編19考古、p219.第186図54・55。
- 4 平田天秋・西野秀和1982『七尾市奥原縄文遺跡・奥原遺跡』 石川県立埋蔵文化財センター、p47.第32図。
- 5・6 吉岡康暢・小嶋芳孝ほか1976『北陸自動車道関係埋蔵文化財調査報告』 石川県教育委員会・石川県 北陸自動車道埋蔵文化財調査団、p87.第85図18。同報告、p175.第194図5。



第3図 県内出土の板状鉄斧類似資料集成図(S = 1/2)
1 旭遺跡群第43号住居跡、2・3 七ツ塚墳墓群B20号土坑、4 奥原遺跡第2号住居跡



第4図 県内出土の袋状鉄斧集成(S = 1/2)
5 塚崎遺跡第21号竪穴住居跡、6 塚崎遺跡D6号土坑

第1表 県内出土の鉄斧計測表

番号	時期	長さ(cm)	基部幅(cm)	刃部幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	備考
1	後期前半	7	3.4	3.4	0.2		
2	後期後半	4.95	2.45	3.55	0.2~0.28	17.3	一部欠員
3	後期後半	6	2.1	3.95	0.18~0.3	18.4	
4	後期後半	2.1		4.5	0.2	6.3	三角形鉄片?
5	終末期	6.5	1.9	2.4	0.3~0.5	21.2	袋端部折り返し
6	終末期	9.7	3.5	4.5	0.4~0.6		鉋2、刀子1、鍬・鋤先1と共伴